



この機会に

じっくり反省してみたらどうか

いよう暫らく…。何回となく訪ねて呉れたらしいが、留守で失礼した。ちょうど婚礼やら病人やらで…。まあ許して呉れ給え。

不順勝ちの天候も、さすがに彼岸を過ぎると、だいぶ春めいて、今日などは雲一つない上天気。せっかく俗塵を避けての客来とあって、太陽も気を使うて呉れたのかも知れん。

家も庭も小そうて狭いところじゃが、環境の美しさは格別。いっそのこと、食卓を庭に移しての小宴も一興じゃろう。何？飲んだら原稿が書けんと…。？放っとけ、放っとけ。そう商売意識を出さんで、田園の春を満喫して行き給え。

しかし、せっかくのお客様にお土産が無うては失礼に当らう。酒の肴になるかどうか判らんが、儂(わし)の話をききながら、一盃やり給え。

さっき君が云うておったように、お互い気になるのは、当面の農業環境の動向じゃろう。これらについては、時間があつたら、また後で話すとして、ここで提言したいことが一つある。

というて、格別むずかしいことではない。直接にせよ、間接にせよ、およそ農業に関係する者は、官にあると野にあるとを問わず、この際、これまでやってきた仕事などについて、じっくり反省したらどうか…と云うことじゃ。

アハ…。案の定、<sup>△</sup>つまらんことを…。と云うような顔つきをしとるが…、これは君が、そう軽るく見る以上に大事なことじゃと思うがなあ。

なるほど、当面の農業環境はいかにも悪い。悪いのは事実じゃが、これは、環境の悪化というよりは、むしろ各人が見とおしを付けかねて、疑心暗鬼しとるのではないか知らん？

お上ではせつせと<sup>△</sup>農業政策<sup>△</sup>に関する文章を作りはするが、とうてい現実の事態には追いつけ

ず、このところ、やや自信喪失気味のようなじゃ。そして、その作文のお蔭で、生産農家や関係業界がウロチョロさせられておる。

<sup>△</sup>すくなくとも52年度における農家の年間総収入は、1戸当たり200万円程度、とし、内地における経営規模は、<sup>△</sup>水田農業<sup>△</sup>にあっては4ha、酪農経営にあっては乳牛20頭程度、を目標とし、

<sup>△</sup>これに必要な各種生産資材を安定的に供給することが必要である。と云うたところで、農産物を生産するのは農家の諸君、肥料や農薬などの資材を生産供給するのは、それぞれのメーカーではあつても、決して作文する人達ではないよ。

何？今日はえらくご気嫌ななめじゃと？そう、アルコールが入ったせいかも知らんが、そればかりではないよ。<sup>△</sup>総合農政<sup>△</sup>の基本を米作の生産調整において、酪農や果樹、園芸部門への転作を勧奨する以上、それだけの裏付けがのうては困まるのじゃが、たとえば、<sup>△</sup>そうやたらに野菜作<sup>△</sup>に転換されても、いたずらに供給過剰を来たし、生産者価格の低落を来たす。から、<sup>△</sup>やたらに野菜作<sup>△</sup>に転換されては困まる。と新聞誌上に報道されておったように思うが、どうやらあれはウソではないらしいなあ。

こういうことでは致し方がないよ。と云うて、儂は何も為政者だけに反省を求めるつもりはない。農家諸君は農家諸君の立場で、また関係業界は関係業界それぞれの立場で、じっくり情勢を分析するなり、計画をねり直すなど、いろいろやるべきことがあるように考えとるのじゃが、君はどう思うかね？

待望される

考える農家の出現

問題を具体的に取り扱えば、もっと判りやすくなるじゃろうが、それでは儂の考えはハッキリ打ち出せても、アト味が悪くなるろうとも考えられるので、この問題はこのくらいにして、話をかえて、<sup>△</sup>これからの日本経済と農業<sup>△</sup>について、ちょっと触れておこう。

先日、あるところで、農業技術研究所の並木正吉先生の講演を拝聴した。その講演の終り近くで、並木先生は<sup>△</sup>日本経済と農業の在り方<sup>△</sup>。というような意味で、大変有益な話をされたので、その話の概要をきかそう。

わが国の経済は、近年驚異的な発展をとげており、貿易外収支(観光収入、運賃収入などを含む)と、一般経常収支を含めると、45年度末には25億ドルの総合黒字が予想されそうだと云われる。

では、これからの日本経済をどうして伸ばして行かねばならないかと云うと、遺憾ながら日本には目ばしい工業資源が殆んど見当らん。そこで経済を高度に発展させようと思えば、何をおいても必要資源の輸入を増やし、これらを加工して輸出しなければならぬ。これは常識じゃがね。

さて然らば、1960年代の10年間の日本の累積国民総生産はどのくらいかというところ、9,000億ドル。

ところが、1970年代の10年間には、日本の累計国民総生産が一体どのくらいになるかというところ、なんと4兆ドルになると予想されるのじゃそうなる。1ドル360円として換算すると1,765兆円という巨額になる。

これに対して、昨年1年間における「世界の国民総生産額」は…と云うと、これは2兆億ドルにしか過ぎん。あれこれ比較してみると、日本の経済実力がどの程度かということが判ろうという。あまり物には動ぜん儂じゃが、この事実にはいささか恐れ入るとよ。

ただ、並木先生も云われておったように、最近国際間における日本の評判はどうも芳しくない。何かと云うたら、君も知っとる例のエコノミカル・アニマル観じゃ。

経済の繁栄大いに結構、しかしながら、国際社会は、もちつもたれつ、自分だけ良ければそれでええという訳で、我がもの顔にまかり通られては、わきの国々から洗い顔もされようし、悪口も叩かれよう。

そこで、これからの日本は、農産物の生産性を高め、できる限り輸出に振り向けなければならぬと、並木先生は云われておった。

これを裏返えすと、これからの「わが国の農産物価格は、これまでのようには引き上げにくくなるだろう」という訳。そして、ここがポイントじゃね。つまり農産物も、他の産業の場合と同じように、生産から、流通の面で強く合理化が要求されるということじゃ。

ちょっと待ち給え。これに関連して気がついたことがある。わが国の施設園芸が盛んなことは君

も知っていよう。

具体的に云うと、42年度の施設園芸面積は、7,200ha(農林省調査)で、オランダの6,500haを抜いて、世界第1位に達したと報告されとるが、では1戸当たり施設規模はどうかというところ、残念ながらわが国の場合は、平均1,000m<sup>2</sup>だということに、オランダの場合は6,000m<sup>2</sup>だそうなる。ちよつど日本の場合の6倍にあたり、中にはもつと大規模なものもあるらしい。

総面積においてオランダを抜いても、平均1戸当たり経営面積において、オランダの1/6と云うのではあまり自慢にはならぬ。卒直に云うと、何の彼のたと論議してみたところで、経営規模の狭小性と、経営基盤の脆弱性が改善されんことによつて、日本農業の将来に期待をかけることは、残念じゃが無理かも知れん。数年前「考える農家」ということが、しきりに云われた時があったが、今日ほど、その「考える農家」出現が要望されておる時はあるまい。

農業経営は今後ますますむずかしさを加えて行こう。しかし、むずかしいのは何も農業に限ったことではないよ。どの産業とでも同じこと。ただ時代のむずかしさに直面するのが、農業が一番おそかったので、その「とまどい」が、大きいと云う訳じゃろう。

まだまだ話したいことがあるが、また次の機会にして、この辺で一つ飲み直しとするか。

..... 寒暖恒ならずというよりも、こと  
**あとがき** .....

しの春はまだ遠く、拙宅の梅が3月の下旬だというのに、ちよつど見頃というのだから、嗚然とせざるを得ません。そうは云うものの、ひそやかな足どりで春は近づいているようで、晴れた日の天空をご覧なさい、日頃はスモッグによごれている東京の空も、うっとりしているような感じがする時があります。

米の生産調整に伴う減反の割当も、聞くところによると比較的協力ムードで進んでいるというのは結構なこと。しかしながらいわゆる総合農政の浸透に伴い、生産農家は一様に心理的動揺を経験されたと思います。

とにも角にも、「農業は変わる」ということは否定できない成行だと思つて。経営の基調を、ここに置くべきでしょう。(K生)